

デザイン部会

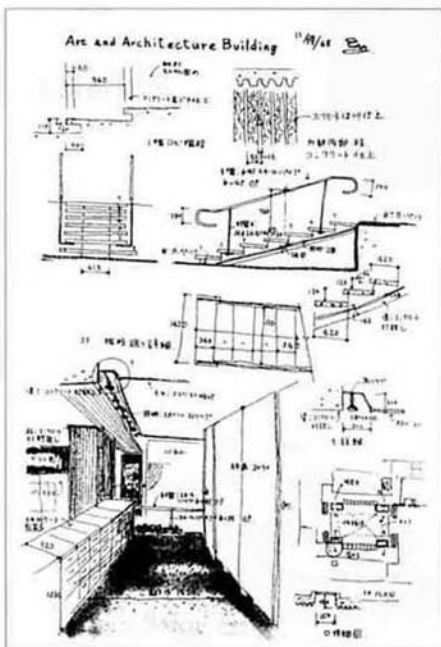
今、必要とされる「ものづくりの心」

遠藤勝勲氏の講演から



デザイン部会長 連 健夫

デザイン部会では「建築とプロセス」をテーマに毎月、講師を招いてフォーラムを行なっているが、今回、菊竹清訓建築設計事務所で40年余り右腕として支えていた建築家・遠藤勝勲氏に「ものづくりの心」というタイトルでお話いただいた。早稲田大学工業高等学校から穂積先生の紹介で菊竹事務所に入った時のこと、製図の正確さ、模型作りのうまさなどをかわれたこと、菊竹氏の奥様に「線とは腹で描くものです」と言われた事、設計図どおり現場では進まないこと、ホテル東光園の工事で菊竹氏が杭打ちした後に柱の位置を変え、苦慮の末キャンティでもたせたこと、現場監督がNOでも職人に直接談判し可能ならば実現することなど、菊竹事務所を陰で支えていた実務家の説得力ある興味深い話を聞くことができた。圧巻だったのは彼自身が描いた膨大な量のスケッチであ



遠藤氏のスケッチ1965, 11, 17
(イェール大学建築芸術学部様, ボール・ルドルフ)

る。1965年に米国を訪ねた時をきっかけにスケッチを始めた。納まりを見れば設計者の意図が分かると、ミースやサーリネン、カーンの作品を徹底的に写しとった。リチャーズ・メディカルタワーをスケッチしている時にガードマンにつかまり、当時、ペンシルベニア大学に留学されていた香山先生に助けていただいたエピソードも話された。氏の描くスケッチは何しろ正確で細かい。材料、寸法はもちろん、色、模様、目地なども記入されている。配置、平面、断面、展開、パースと表現も多彩である。それも、1枚に30分程度ですばやく仕上げるとのことである。この話を聞いている中で、現在の大学や事務所内における建築教育の中で、何か大切なものが抜け落ちていような気がした。質疑の中、「1分の1で考えることが大切である。職人は20分の1では分からない。現寸でその場でスケッチを描けば分かる、職人には会話の仕方がある」などの氏のコメントにスケッチを描くことの信念がうかがえる。この意識は、コンピューターが設計に入ってきて、ますます遠ざかる傾向にあると氏は苦慮する。確かに考え抜いたディテールの手垢で汚れた図面は見られなくなった。現場の納まりが分かった上での工夫、縮尺と現物とのバランス感覚などは、最終的な建築を実現させる上での必要不可欠な能力であろう。それを獲得する機会と場がなくなりつつあると解釈できる。氏は「古いタイプの人間です」とおっしゃった。私自身、今はCADで図面を描いているが、実務を覚えたころは製図板、手書を経験し、氏の話がズンと重く感じられた。次の若い世代はどうなっていくのであろう。建築が対極のものを同時に扱い、バランス感覚を求められるものであるならば、デジタル化が進めば進むほど、アナログ的視点が併せて求められよう。氏は「ものづくりの心とは心の強さ」と言う。この「心の強さ」とはスケッチでものを考えることができる建築家の自信の裏打ちであろう。次の日、大学の設計指導で私は早速、学生達に氏の著書：「見る測る建築」(TOTO出版)を紹介した。

<(有)連健夫建築研究室 主宰>